

桂川・相模川流域協議会会報誌

あじえんだ

2010.12
第25号

流域交流シンポジウム「川は誰のものか」 茂倉ダム2号堤の撤去の現場視察

[新連載]

流域紀行 ～源流を訪ねて 山中湖～

川の記憶を訪ねて

村の暮らしの中の川① 「関東大震災の記憶」

流域交流シンポジウム「川は誰のものか」

◆開催日時：平成22年9月25日(土)・26日(日)

◆開催場所：厚木市 相模大橋上流河川敷

◆参加者：80名

◆報告者

NPO法人日本自然保護協会 出島誠一氏 日本野鳥の会神奈川県支部 石井 隆氏

NPO法人神奈川県自然保護協会 青砥航次氏 相模川キャンプインシンポジウム 岡田一慶氏

平成22年度の桂川・相模川流域協議会のシンポジウムが、「川は誰のものか」というテーマで厚木市の相模大橋上流河原(中津川と相模川の三川合流地点)にて開催されました。

今回のシンポジウムでは流域協議会の活動を広く、多くの方に知って頂くという趣旨で、初の屋外にてキャンプ形式で行いました。当日は台風が関東に接近していましたが、風が強いながらも長袖一枚でも過ごせる位の晴天となり、約80名と多くの方々にご参加いただきました。

今回のメインテーマとなった茂倉ダムは、斜面の崩壊防止など防災目的で設置された治山ダムですが、利用目的がなくなり、自然再生への一歩として全国で初めて撤去されました。今回のシンポジウムでは、このダムの撤去の意味を考え、改めて「川は誰のものか」を考える良い機会となりました。

シンポジウム前夜は台風が関東に接近し、開催断念もあり得た状況だったが、運良く台風一過の秋晴れになった。9月25日の相模川河原での準備は、遅れてやってきた資材を満載したトラックの到着で本格的に始まった。テントの組み立て、舞台の設営、スタードームの組み立て、受付の設営、豚汁の準備、音響のマイクテストなど順調に整っていった。

サプライズ企画を用意した。直径8m円周24m、高さ4mの「スタードーム」を造ることだ。完成すれば、感動的なものになることはまち

がいなかった。

ステージでは「アクア」の演奏が始まった。女性ボーカルの透明感のあるやさしい声が夕闇に浸透する。「焚き火トーク」では講師のNPO法人日本自然保護協会の出島さんが、ダム撤去に至る経緯を丁寧に解説している。そして相模川流域でも、撤去できる状態の治山ダムが必ずあるはずだと力強く語った。「河川整備計画ウォッチングトーク」では日本野鳥の会神奈川県支部の石井さんが、野鳥保護の視点で河原の生態系の保全を訴えた。NPO法人神奈川県自然保護協会の青砥さ



んは、川の洪水のかく乱作用も含めた変化が川の生態系のバランスを保持し、川が川らしい姿を形成していることから、個別の場所の保全だけでは十分ではないことを指摘した。

今回は「花火大会」がほぼ同じ河原で開催されることから、花火の打ち上げ時間等の調整が必要だった。30分の休憩時間を取り、その間に大きな花火が何発も打ち上げられた。まるで私たちのシンポジウム開催を祝福するように。

「ぼやぼやバンド」の演奏は、豪快に打ち上げられる花火を演奏の一部のように見事に取り込んで、パワフルに始まった。山梨県から参加した若者たちが、参加者を巻き込んで楽しそうに、フォークダンスのように盆踊りのように、輪になって踊っている。

翌日は朝から気持ちのよい秋晴れになった。座架依橋下でカヌー講習会が行われた。小学生の男の子は、初めはお父さんと一緒にカヌーに乗っていたが、「僕一人で乗りたい」と言って、カヌーに挑戦している。峯谷さんは何でもない所で見事に沈(沈没)したが、実に楽しそうである。

しかし課題も見つかった。この場所は、コンサートやシンポジウムを行うには都市化し過ぎている。近隣の住民には申し訳ない気持ちが残った。

いろんな人々がこのシンポジウムの準備に関わり、そして手作りの「キャンプインシンポジウム」ができ上がった。紙面の関係で、すべての方を紹介できないが多くの方々に協力していただいた。

(報告者：岡田 一慶)



今回のようなキャンプ形式での流域シンポジウムの開催は、桂川・相模川協議会が創設されて以来、初めての経験であったが、当日は朝早く準備段階から多くの方々に積極的にご参加いただくなど、参加者全員でシンポジウムを作り上げているという意識がより感じられるものとなった。

しかし、パネルディスカッション等や参加者同士の意見交換を行う時間等をもう少し長くするなど、シンポジウムの構成を考えておけば、よりシンポジウムを屋外で行ったという意義が見いだせたはずである。今回のシンポジウムは参加者皆様のご協力により、手探りながらも成功に終わったと考えている。しかし、問題点もあったため、この経験を生かし、よりシンポジウムの意義を高めると共に、より活発な意見交換の場となるようにしていくべきであると思われる。

神奈川県事務局 鈴木

流域シンポジウム事前学習

茂倉ダム2号堤の撤去の現場視察

- ◆開催日時：平成22年8月27日(金)
- ◆視察場所：群馬県みなかみ町茂倉ダム
- ◆参加者：28名

流域シンポジウムを開催するに当たって、流域のシンポジウムの事前学習として、茂倉ダムの撤去の現場視察を行い28名が参加した。



茂倉ダムは治山ダムで、沢の山腹崩壊、斜面崩壊場所に設置し、それ以上の崩壊を防ぎ、土石流の防止のためのダムである。宮ヶ瀬ダムなどは治水、発電などの多目的ダムで、河川法の河川整備計画に基づいて設置されるのに対して、治山ダムは森林法に基づいて設置される。河川の上流部に設置されることから、河川の連

続性を損ない、溪流の生態系に大きなダメージを与えている。

治山ダムの撤去は全国で初めての試みなので、「川はだれのものか」キャンペーンシンポジウムで話を聞きたいと思った。市民部会で、シンポジウムの打ち合わせを行った時、「現地に行って、実際の姿をみたい」との提案があった。6月になって、シンポジウムの講師の出島誠一さんから赤谷森林環境保全ふれあいセンター（通称：赤谷センター）の鈴木所長、藤代さんを紹介していただき、8月27日、現地視察が実現した。

茂倉ダムの場所は群馬県と新潟県の県境にある猿ヶ京温泉の近くだ。利根川の最上流域の支流である赤谷川があり、相俣ダムが建設されている。ダム上流で2次支流の茂倉沢が流れ込んでいる。茂倉沢には治山ダムが13基設置されており、下流から2番目の治山ダムが視察現場である。茂倉沢を含めて流域面積630haの赤谷川流域は、中国侵略に続く対米戦争で材木需要のために森を切り倒したため山が荒れ果て、山肌が崩壊し沢が崩れた。戦後全国的に治山砂防ダムが建設されることになり、赤谷川流域にも茂倉ダムが造られた。

しかし現在では森が回復し、山肌の崩壊も止まっている。存在意義がなくなっている治山ダムを撤去して、溪流の自然を回復する新しいプロジェクトが動き出した。昨年撤去された茂倉ダム2号堤は高さ7m。幅27mで、中央部1 / 3

だけが基礎部分を含めて撤去されている。全面撤去を目指して現在、下流への土石流の影響などを調査中だ。ダムの開削工事は3日で終了した。河床には木工沈床を組み、壊したコンクリートが詰められた。残された両岸の堤体は大きな土石流を防ぐ形となっている。工事費は6,500万円。思ったより工事費は高くない。また、200m下流には高さ1m程の中央部が開いた保全工が新たに設置された。撤去された場所は川の働きによって浸食がすすみ、沢らしい景観を取り戻しつつあるように見えた。500m上流には高さ3mの3号堤があるので、着実に撤去を検討してもらいたい。ただ、最下流の1号堤は高さが12～13mあり、堆砂量もかなりある様子だったので、最後まで残りそうな感じである。相模川の上流部でも撤去できる治山ダムが見つめられると確信して現地視察を終えた。

（報告者：岡田 一慶）



当日は案の定、炎熱地獄。この世が大きな鍋だとすると火にかけている様だ。しかしバスに乗り込めばクーラーがガンガン効いて快適なはずだった。私が乗車したバスはクーラーが効かなくなってしまった。窓を開けて風を送り凌いだ。

ランチタイムをはさみ、目的地に無事に到着した。山の空気は心地よく気持ちいい。その場所から歩いて視察する。持参した長靴を履く。私は、周りの人をそっと見て違和感を覚えた。彼らの長靴は履き口にひもが付いていてぎゅっと結ぶと足との隙間が埋まり水が入らないようになっている。そして普段から長靴を履いているのだろう。それぞれ似合っていて清々しく格好良かった。一方、私はいかにも素人だ。ポコポコした畦道をヨタヨタと歩きメインの沢の前で足が止まった。丈の短い長靴に浸水する様は、容易にわかった。なるべく浅いポイントを見つけても一歩目から水が入ってきて足元はビチャビチャになった。

今回の案内人の一人、赤谷森林環境保全ふれあいセ

ンターの藤代和成氏（元タイガースの赤星選手をふっくらさせたような方。私は一目見て似ていると思った。失礼しました。）がダムについて説明をして下さっている最中、私の右足首にチクリとして、恐々チノパンの裾を手で引くとUの字に動く虫を発見。努めて冷静に藤代氏に足に虫がいると言った。彼は慣れた素振りで屈み虫を指で取ってくれた。腕を頭上に上げて「これが山蛭です。」とみんなに示した。彼はみんながどよめいたのを受けぱつりとつぶやいた。「山蛭が出るとオレの話を聞いてくれなくなる…。」

私自身、足元がぬれて冷たくて気持ちいいような不快なようで気になって折角の説明が半分も頭に入らず何をしに群馬まで来たのか。本当になさけない。おまけに勉強不足の為、ダムの有無や植林の難しい話にもついていけない。だから、せめて日常生活で水をムダにしないとかありがたく使用するか小学生レベルのところをもう一度、見直したい。

藁沢さと子（湘南地域協議会）

相模湖・ダム建設殉職者追悼会

追悼会実行委員 高村雅博

相模川の上流にある相模湖の湖畔にひとつの湖銘碑があります。相模湖を訪れる人でこの碑に気づく人はあまり多くはありません。碑には三カ国語（日本、中国、ハングル）で「相模湖は、わが国で初めての多目的ダムによる人造湖で、昭和15年に起工され、…、神奈川県民は、今このダムと湖から、はかりしれない恩恵—命の水と水力発電…、工事には、戦時下の労働力不足のもとで、日本各地から集められた労働者、勤労学徒のみならず、捕虜として連れてこられた中国人、当時植民地であった朝鮮半島から国の方策によって連れてこられた方々など、延べ三百万人が従事されました。…」と相模湖が造られた歴史の一端が書かれています。



(湖畔に建立された湖銘碑)

この碑は、ダム完成から46年経た1993年に建立されたものです。ダム工事は機械力が無い当時、ほとんどが人力で行われ、過酷を極めたそうです。特に強制労働をさせられた韓国・朝鮮人、中国人は危険な労働や重労働が多かったようです。湖銘碑の裏にはこのダムの建設で犠牲になった（現在わかっている）日本人や韓国・朝鮮人（植民地化によって日本で働かざるを得なかった自由労働者と強制連行された人）55名、中国人（強制連行された捕虜）28名、計83名の名前が刻まれています。戦争中に造られた相模ダムは労働力不足のために働く人の6割から7割が韓国・朝鮮人（熊谷組社史）という記録があります。とすれば当然、殉職者に韓国・朝鮮人の人数が多いはずですが、韓国・朝鮮人は17名程度と推定することしかできません。

毎年、7月の最終日曜日に「相模湖・ダム殉職者合同追悼会」が湖畔に近い県立相模湖交流センターで行われています。32回を数えた今年も300余名の日本、韓国・朝鮮、中国3カ国の人々の参加で追悼会が行われました。追悼会は平和と友好をテーマに実行委員会（県や相模原市、労働組合、ダムの歴史を記録する会）が企画・運営をしています。会場となるセンターのステージには日本の竹をつかったモニュメントが地域の芸術家と実行委員によって毎年、造られています。式では、3カ国の関係者が追悼の辞を述べ、ダム工事の歴史を忘れることなく、平和な世界をつくるために日本と近隣のアジアの国々との友好を誓います。さらに文化の交流をテーマに3カ国の芸術（音楽や舞踊）が披露されます。追悼式が終わると遊覧船で湖底に沈んだ勝瀬地区の上を通りながら当時の工事の様子を偲びます。

この追悼会には11年前から地域の小・中学生が参加しています。式は小・中学生によるモニュメントに設置した蝋燭の点火に始まり、小・中学生による演奏や合唱で終わります。それは、地域の若者に相模湖の歴史を伝えたいと考えたからです。「井戸の水を飲むとき、井戸を掘った人の労苦を忘れるな」ということわざがあるそうです。相模湖・ダムの歴史を知って、この湖の水を利用できることに感謝の気持ちと平和の大切さを考えて欲しいと思います。「追悼会」をこれからも継続して、このダムの歴史を伝え続けたいと思います。



(桂北小学校の児童とモニュメント)

市民調査全国大会で「桂川・相模川流域 田んぼの生きもの調査2008・2009」を報告

報告者 倉橋満知子 資料作成 大木悦子

今年(2010年)は、生物多様性年。市民調査全国大会が7月3・4日(財)日本自然保護協会の主催で国立オリンピック記念青少年総合センターで行われ、桂川・相模川流域協議会は「桂川・相模川流域の田んぼの生きもの調査2008・2009」報告書に基づいて4日に参加、発表しました。

当日は北は北海道、南は沖縄から65団体が発表し、地道に調査、活動されている内容を報告されました。4会場に分かれての報告会でしたが、田んぼ関係の調査が他になかったせいか、大勢の方が聞いてくれました。

発表内容の概要

■生物多様性からみた課題とアジェンダ 2 1

桂川・相模川への提言「赤とんぼの群れ飛ぶ田んぼと子ども達の遊ぶ小川(水路)の復活を」

・生物多様性(山梨・神奈川)戦略の策定

絶滅危惧種が多い里地里山環境の保全・再生

・川・水路・水田のつながりを復活する

ナマズ・ドジョウなど生物の遡上できる水田魚道

・水路対策：生活排水・終年通水・多自然水路

・生物生息環境の保全・再生

田んぼの植物利用の産卵 蛹等のための土畦ホタルのすめる光環境の維持・冬水田んぼの推進

・周辺環境の保全・再生 ため池や緑地の連続性

・外来種対策：アメリカザリガニ等の駆除や教育

・田んぼの生きものたちにまなざしを

田んぼの生きものや自然を学ぶ場を作る
環境支払い制度(田んぼの生きもの調査に農業者や県民の参加を勧める)

■箱苗農薬に関する論文の紹介

「フィプロニルとイミダクロプリドを成分とする育苗箱施用殺虫剤がアキアカネの幼虫と羽化に及ぼす影響」

調査結果

■絶滅危惧種37種(環境省・山梨県・神奈川県)

アカハライモリ等両生類4種、ホトケドジョウ等魚類5種、貝類1種(マルタニシ)、ヘイケボタル等コウチュウ目6種、オコイオムシ等カメムシ目3種、ハエ目1種(コガタノミズアブ)、ミヤ

マアカネ等トンボ目10種、ミズニラ等植物3種、マメハンミョウ等陸生昆虫類2種、シマヘビ等爬虫類2種

■外来生物9種

ウシガエル(幼生)・カワムツ・オイカワ・タモロコ・アメリカザリガニ・サカマキガイ・コモチカワツボ・アメリカツノウズムシ・イネミズゾウムシ



■桂川・相模川流域の田んぼの生きもの調査を実施した9地域(GIS地図作成：關正貴氏)



相模川釣り針・釣り糸調査

～駆除カワウが教えてくれた河川環境～

葉山久世(神奈川県野生動物救護連絡会／かながわ野生動物サポートネットワーク)

放置された釣り糸に絡まったり、釣り針を飲んで被害にあう野鳥がいることが知られていますが、相模川で09年に有害駆除されたカワウにも高い頻度で釣り針が刺さっているのが認められました。そこで、河川の釣り針・釣り糸残留状況を調べることにしました。

◆調査した日：1回目 2009年9月22日(アユ解禁中)、調査者9名 6区画(1.2km)、
2回目 2009年11月21日(禁漁期)、調査者12名 5区画(1.0km)

◆調査場所と方法：相模川の左岸(海老名市側)、あゆみ橋直下から下流へ約2.2km区間(図1)。GPSを用いて1区画200mを測り、川岸をゆっくり歩き釣り針・釣り糸を探しました。水際から岸側2mの範囲を2日間で計11区間踏査。見つけた釣り針・釣り糸は回収し、区画毎に洗浄、乾燥後、質量を測定しました。



図1 調査場所

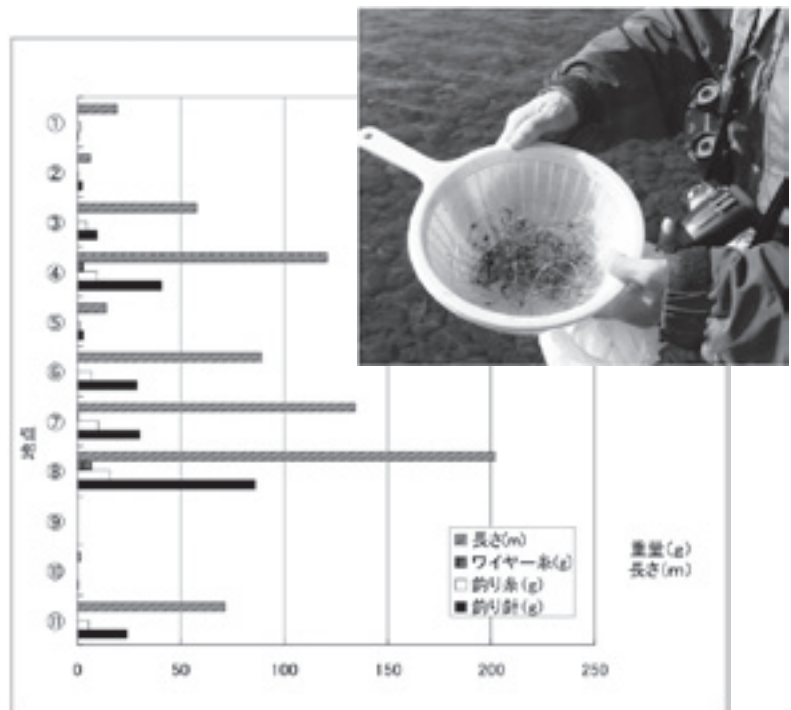


図2 相模川左岸で回収した釣り針と釣り糸

結果：回収した糸は53.16gで、総全長は716.43m、(1.00g = 13mで換算)、釣り針の総重量は225.34gでした(長さ集計ではワイヤー糸は除いてある)。釣り針、釣り糸はほとんどがアユ用のもので区画によって量に大きな差が見られました(図2)。釣り針と釣り糸は「瀬」近くの川岸に特に多く、こうした場所は(通り道、釣りをする場所として)利用する人が多いため捨てられたり、落としたまま放置される釣り針・釣り糸もまた多くなると考えられました。

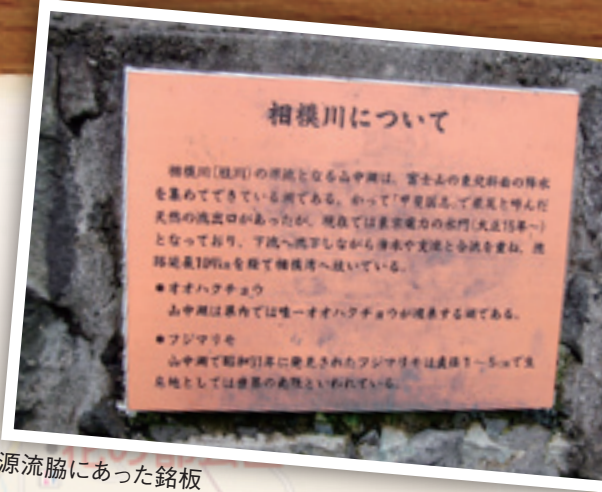
今後の課題：川岸に落ちている釣り針と釣り糸は、まずは釣り人が努力するべき問題と考えます。釣りのゴミを落とさない、見つけたら拾うなど、釣り人の方々には、一層の努力をお願いしたいと思います。そして、自然保護する側は、釣り人や釣り関係者にどうしてゴミを捨ててはいけないのか、放置するとどんな問題があるのか、具体的な情報をわかりやすく提供し、河川環境の改善につなげてゆく必要があります。

一方、水中に根掛かりした針・糸は簡単には回収できません。過去に川底の清掃をしたが、費用も手間もかかるため、最近では実施できないという話を相模川の漁協関係者から聞いています。今後は釣り場管理者などに働きかけ、定期的な川底の清掃などの具体的な対策につなげられたらと考えています。

この調査はかながわ野生動物救護連絡会有志とNPO法人神奈川ウォーター・ネットワークが協力して行いました。



白鳥の親子



源流脇にあった銘板



桂川の由来と言われる桂の木



山中湖東岸より臨む富士山



美味しくいただいたほうとう

流域紀行

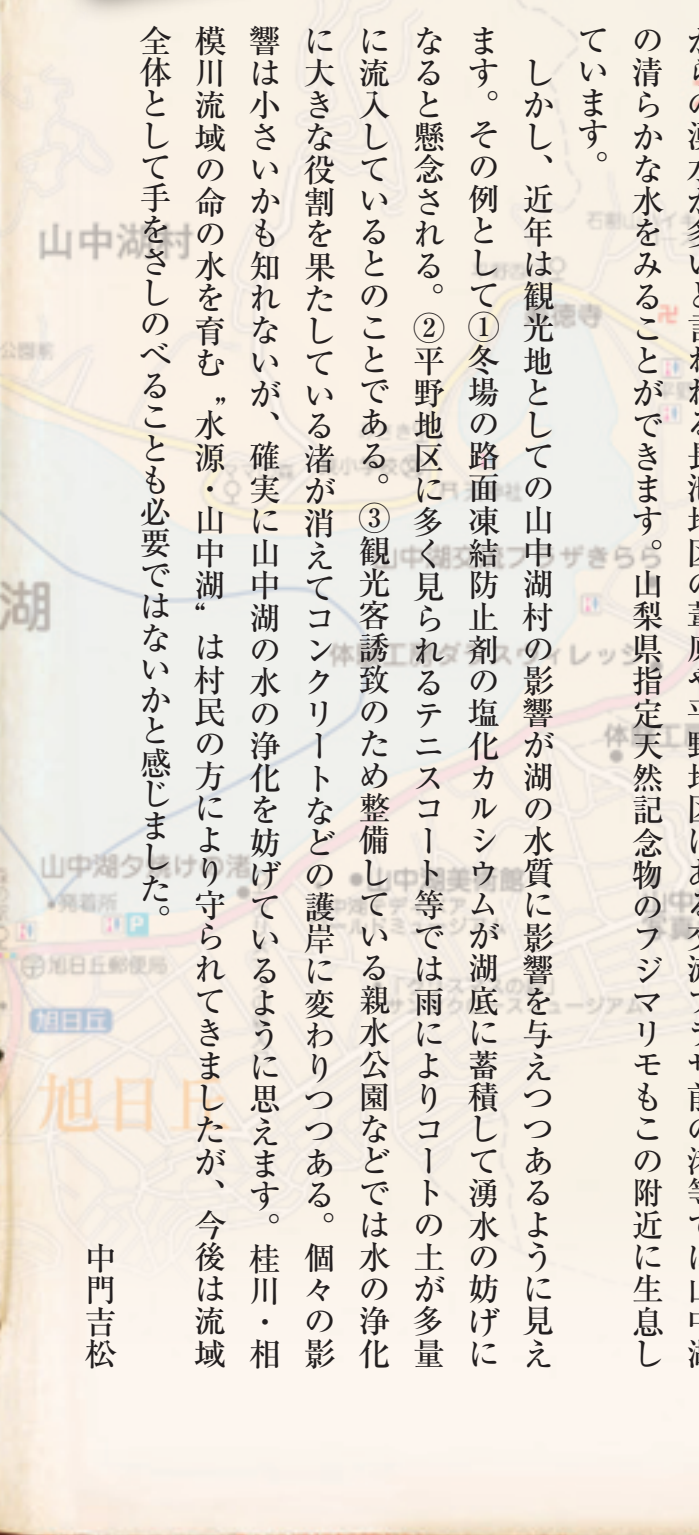
源流を訪ねて 山中湖

桂川・相模川の水源である山中湖は、他の多くの河川の水源と違い、湖面を満々と湛えているため、水源の始まりの一滴を見ることはできません。霊峰富士や周りを取り巻く石割山、三国山等の豊かな森からの地下水が長い年月をかけて湖底から湧水として私たちの母なる川を産み出しているのです。周囲の豊かな森やすすき野は入会地として長池・平野・山中（中野）地区の人々が近世以前から助け合って長年に渡って守り、現在でもすすき野の火入れなどは協同で実施している、と、今回のガイドをしていた会員の樋口さんが話されていました。湖底からの湧水が多いと言われる長池地区の葦原や平野地区にある交流プラザ前の渚等では山中湖の清らかな水を見ることができません。山梨県指定天然記念物のフジマリモもこの附近に生息しています。

しかし、近年は観光地としての山中湖村の影響が湖の水質に影響を与えつつあるように見えます。その例として①冬場の路面凍結防止剤の塩化カルシウムが湖底に蓄積して湧水の妨げになると懸念される。②平野地区に多く見られるテニスコート等では雨によりコートの土が多量に流入しているとのことである。③観光客誘致のため整備している親水公園などでは水の浄化に大きな役割を果たしている渚が消えてコンクリートなどの護岸に変わりつつある。個々の影響は小さいかも知れないが、確実に山中湖の水の浄化を妨げているように思えます。桂川・相模川流域の命の水を育む“水源・山中湖”は村民の方により守られてきましたが、今後は流域全体として手をさしのべることも必要ではないかと感じました。

中門吉松

桂川・相模川源流（山中湖水門）



シリーズ 川の記憶を訪ねて

村の暮らしの中の川①「関東大震災の記憶」

小島瓊禮(愛川町在住 元琉球大学教授)

厚木市恩名の生家ですと作家活動を続けていた和田傳(1900-1985)が晩年八十三歳のとき(1982年)に、『神奈川新聞』に連載した「わが人生」*の中で、夜の相模川の投網打ちをした思い出を記している。高等予科二年の大正八年から大学を出た大正十二年まで、夏休みに帰省したとき、地元の友人と二人で組んで、厚木町の隣の相川村川岸から打ちはじめ、矢倉沢街道の大橋の見えるあたりでやめるのが、例であったという。

和田傳は、これを「思えばこの数年間の夜網打ちこそは、相模川の天然鮎とその川畔の人々との最後のかかわりあいだったようである」と回想する。まさにそのとおりであろう。大自然に近い姿をとどめる相模川中流域に、むかしながらの生活技術で生きる人間がかかわる姿はその後に大きく変貌したにちがいない。さらに続けていう。「昭和に入ると相模川そのものが、つまりその水流の大部分が京浜地方の飲料水、工業用水として送られることになり、相模川は子供でも歩いて渡れる野川になり果てる。」

相模野の自然と人生を凝視してきた作家の発言として、その意義はきわめて重い。ことに投網打ちが、大正十二年の夏までであったことが明記されていることが、注目される。その年の九月一日に発生した大地震で、相模川水系の川の水が大減少したと、川沿いの人たちは伝えていく。関東大震災の川の被害である。その後、厚木あたりの相模川の水が細くなったという最大の理由は、この地震による水の相の大変化にちがいない。

相模川の最大の支流である中津川の中流域の半原では、その関東大震災による自然の被害の模様が、いろいろ伝わっている。われわれ七十歳半ばすぎの者の親世代の人たちの体験談である。半原では、中津川の右岸の半原山と左岸の向山(むこうやま)が、ガラガラ・ガラガラ崩れ落ちてこわかったという。山の若返り現象である。地理の学習で、関東地震が丹沢山地の山の若返りであると読んだのは、小学校五年生のころである。形が丸くなった老年期の山が、大地震で山肌が崩れ、きり立った鋭い山容の若年期の山に返るといふ。

中津川も、関東地震で大きく変わったそうである。もとは川幅いっぱい一年中、水が豊かに流れていたという。川に入ると、足に魚が当たるほど、たくさんいたともいう。それ以前は、川底が深く、岩盤まで見えたとはいふ。そここで聞く。それが、砂や石の流出がはげしくなり、川になったという。相模川中流域から下流域に砂利が大量につきもつたのは、一つに中津川からの影響であろう。

半原の宮沢は、中津川の中流域で最大の支流である。半原には中津川に流れこむ沢が何本もあるが、古くから集落があったのは、この宮沢の入りの沢だけである。半原山を越えてに宮ヶ瀬に通じる幹線道路でもあり、いわば大きな沢であった。今では、わずかに流れがあるだけであるが、地震以前には、水が豊富にあつて、水あびができるほどであったという。もちろん鮎も、集落のあたりまでのぼったそうである。

なくなっていたという。それが宮沢に水がとほしくなり、中津川の流れが小さくなり、相模川の水量が減少した原因であろう。相模川水系には、関東大震災の災害以前と以後とで、自然にも大きな変動があつたことを忘れてはならない。

川は生きている。現在の川には、さまざまな過去の歴史の記憶が積みこまれている。相模川水系の現状を見て、人為的な問題を云々する人が多いが、その基盤には自然そのものの大きな変化もある。未来、未来というが、未来には実態はない。実態のある過去から、人間がかってに未来を形象しているだけである。ほんとうに確かな将来を築くためには、それのみあうだけの過去を、深く明らかにしなければならぬ。相模川の未来のために、人間の歴史そして自然の歴史を、しっかりと学んでみたい。川には記憶が生きている。

*厚木市立図書館編「和田傳 生涯と文学」厚木市立図書館叢書・I(厚木市教育委員会・昭和六十三年)

キツタの言い分

代弁人 天内康夫／環境カウンセラー

私はキツタ。森の大きな木に這い上って、一年中緑の葉を茂らせていますので、冬によく目立つ蔦の仲間だとしてフユツタの別名ももらっています。でも、私たちはウコギ科に属して常緑なのに対して、教会の壁をお化粧する本もののツタはブドウ科で、秋には葉を落とします。夏に青々としていますのでナツツタとも呼ばれます。

私たちの種は鳥が運んでくれますので、公園の木立や鎮守の森にもよく芽を出します。小さなうちはどなたも気に止めませんが、少し太くなりだすと目の敵にして蔓を切ってくれるお節介屋さんがいます。「お前は邪魔だ。消えろ！」とでもいうのでしょうか。

私のほかにも、フジやアケビなど、木にまとわりつくつる性の植物はたくさんありますが、しばしば偏見の目で見られて気分がよくありません。私たちは「すがりつき植物」ですが、すがりつく相手には了解をもらって今まで進化してきました。お互いに利益を与え合いながら、持ちつ持たれつの関係です。

皆さん方はなかなか思いつかないようですが、温帯の寒くて乾燥した冬を乗り切る大きな立ち木の幹を、私たちキツタは葉で覆って、いわば冬のマントになってあげています。そのために私たちは、夏場は薄暗いのを我慢して過ごし、冬木立の中でせいいっぱい生長させてもらうのです。こうした関係を、皆さんは「相利共生」と呼んでいるようですね。

南の地方には、「絞殺しの木」などという、ひどい名前で呼ばれる植物があります。たとえば沖縄などで育つガジュマルです。鳥やオオコウモリなどに運ばれた種子が、他の木の根元で発芽し、生長すると幹に取りついて太くなり、やがては支えになった樹木を枯らしてしまう、というものです。まるで殺人鬼のように誤解されますが、もちろん冤罪であり、私たちの共生の姿でしかありません。

スギやヒノキのような、まっすぐの材をとる目的で育てる森林については、材質に少しでも負担をかけてはいけないことは重々承知しています。切り取られても文句は言いません。しかし、どなたの目にも触れる公園の立ち木と共存共栄する私たちを、片端から伐り倒す行為は、はたして正しい自然理解といえるのでしょうか。お考え直しをお願いします。



何度も美味しく、川を守る(下)

あらいそECOクラブ 平田雅子

前号で、究極のエコクッキングは、お鍋で最後
の一滴まで食べてしまうことだと、私なりのエコ
(手抜き?)クッキングを紹介させていただきまし
た。実は、まだまだ続編がありまして・・・。
煮物の残り汁、ここにはお砂糖もお塩もしょうゆ
もいっぱい入っています。それだけでなく、野菜の
おいしい旨みも。それを十分に利用してみました。

◎おでんの次の日

具はなくなったけれど、おいしい汁はたっぷり
残っています。

①おからの煮物・・・

残った具があれば細かく刻む。おでんとは別の
お鍋を用意し、おからを炒る。おでんの残り汁と細
かい具を加えて火を通せばできあがり！おでんの
汁は多いです。まだまだ作れます。

②切干大根の煮物・・・

軽く水で戻した切干大根をおでんの汁で煮込む
だけ。ニンジンやシイタケを加えてもよし。

こんなに作っても、食べきれないという方も、こ
の2品は冷凍保存できます。私はこんなちょっと
した冷凍ストックに日々ずいぶん助けられてい
ます。

③おからの春巻き・・・

おからの煮物は苦手な子供も食べ飽きた方にも
お勧めです。春巻きの皮に①のおからを乗せます。
この時、少しケチャップをたらしたり、チーズを一
緒に巻くのがポイント。後は、普通の春巻き同様に
揚げます。餃子の皮でも同様に。

◎ゆで汁も使ってみませんか？

①大豆の水煮・・・

大豆を煮た後の煮汁。味付けは何もありません
が、何とも言えない大豆のいいにおいがします。捨
てるのはもったいなくて。

パンを焼く時の水代わりに。また、シチューやカ
レーを煮るときに、加えるとコクがでるようです。

②ひじきの煮物・・・

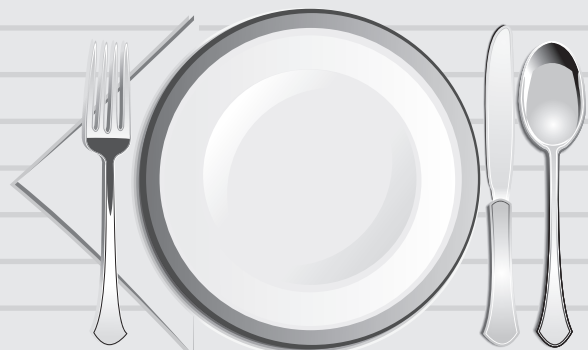
大豆の五目煮が余ったら、そこにひじきを加え
ます。それだけで美味しいひじきの煮物に大変身。

③ひじきご飯・・・

ひじきの煮物が余ったら、そのままご飯に混ぜ
ます。香ばしいりごまも加えればばっちりです。

さて、お鍋の一滴までの利用法、いかがでした
か？全部使い切れた時は本当に気分爽快。お水も
きれい♪です。

作る時は作る。上手に保存して、食べ過ぎない。
川にも体にもやさしい私流エコクッキングをこれ
からも続けたいと思います。



～ 流域での出来事 ～

山梨県内の桂川・相模川流域のいくつかの出来事をご紹介します。

大月市猿橋周辺桂川川底清掃

8月18日、盛夏のなか、大月市猿橋周辺の桂川(相模川)において桂川・東部地域協議会のメンバーや地元の漁業協同組合の方々が見守る中、ダイバー3人が潜水し、約300メートルにわたり、ビデオカメラで撮影しながら、川底のごみを拾いました。

透明度は概ね2メートル程度で、鯉や鮎、小魚の群れなども見ることができたそうです。河原のごみは漁業協同組合の方々の日頃の活動により、目立たなくなってきたてはいましたが、川底にあった空き缶やペットボトルなどを拾い集めました。

撮影した動画は今後何らかの機会でご披露目したいと考えております。



第1回源流サミット開催

山梨県南都留郡道志村で10月22日から24日にかけての3日間「源流に新たな光を照らす」をテーマに、自治体や林業関係者らによるパネルディスカッションなどを開催しました。

このサミットには会員である道志村が会場ということもあり、当協議会も後援として支援し、会員の皆様にサミットの開催をお知らせしたところ、パネルディスカッション当日は多くの会員が参加しました。

パネルディスカッションにおいては、源流の保全に向けて、上流域と下流域との活発な交流を求める意見や提言が出されました。

源流域の11町村で採択した全国源流サミット宣言により、源流を社会全体で守り、育む運動を展開することを誓いました。



2010年度桂川・相模川流域協議会定期総会を開催しました

2010年5月22日(土)13時よりサンエールさがみはら(相模原市)において、2010(平成22)年度桂川・相模川流域協議会定期総会を開催しました。

総会議事に先立ち東京大学愛知演習林でご活躍の蔵治光一郎講師に「森林と水質・水量の関係について」のテーマでご講演をいただきました。

出席者は皆熱心に聞き入っており、「科学者の仕事」「捨て間伐」「平準化作用と蒸発作用」「作用と機能」「人工林放置」「豊田市水源保全基金」「森の健康診断」など数多くのキーワードにより、これまでの研究成果やこれからの当協議会の活動との関連についてお話をいただき、予定時間を30分近くも超える長時間の講演となりました。質疑応答も活発に行われ、時間をオーバーしてなお、質疑がなされるという関心の高さでした。



蔵治光一郎先生講演

講演に引き続きまして、各地域協議会の活動内容の発表が行われました。

各地域協議会においては、それぞれの地域課題に応じた活動を行っていますので、その活動を生の声で総会の場で相互に活動内容を発表することで他の地域協議会がどのような考えで行っているのかを知ろうというものです。



地域協議会による報告

その後、2008年、2009年と2年度にわたって実施した「田んぼの生きもの調査」を事業担当幹事の大木さんに報告をいただきました。昨年度末に発行された報告書に丁寧にまとめられていますので、ぜひ一度ご覧になってください。

総会議事は、まず市民部会の石川さんが議長に選出され、総会成立報告が行われました。(会員数227人(団体)、出席者39人(団体)、委任状114通でした。)

2009(平成21)年度事業報告(案)及び決算(案)の審議が行われ、監査報告ののち、承認されました。続いて、2010(平成22)年度事業計画(案)及び予算(案)についても、承認されました。

また、今年度は役員改選の年ということで、新たに幹事が選出され、幹事間の互選により市民部会の河西悦子さん、倉橋満知子さん、相模原市環境経済局環境共生部環境政策課勝又隆一課長、山梨県森林環境部清水利英参事の4名が代表幹事に選ばれました。

地域協議会だより 相模川よこはま地域協議会

相模川よこはま地域協議会は、桂川・相模川流域協議会本体の活動と連動しながら、3つの視点をもって水源環境の保全と健全な水循環を図る活動をしています。①水道水源と河川流域を身近に感じられるよう工夫して啓発活動と環境教育を実施、②経済と環境の両面からの活性化のために水源域の団体等との交流実施、③流域の関連情報を収集・分析し、政策提言、環境重視型まちおこし等に積極的に参加。今回はその中でも、①を中心に活動を紹介します。

★水質問題を身近な飲料水から感じてもらう

今では、ペットボトルのミネラルウォーターは、特に最近の夏場では異常気象・猛暑等による熱中症対策として水分補給の重要性が意識され、売上が急上昇しています。水道水あるいは家庭の麦茶等でも十分なのに、手軽に入手可能のためについ購入してしまいます。地球温暖化対策上もまた水道事業のためにも、もっと水道水の価値を知ってほしいと地域協議会設立以来、水の飲み比べをしてきました。この面では、会員でもある水道事業者としては神奈川県広域水道事業団、横浜市水道局、川崎市上下水道局等、そして全水道労働組合の横浜支部、及び川崎支部の協力を得ました。



水の飲み比べ：毎回おおよそ水道水>はまっ子どうし>ミネラルウォーターの順でおいしいと評価。でも大差なし。ミネラルウォーター愛好者が増えていることが残念(アジェンダの日)

★流域材の良さを感じてもらう

木を使うことによって、森を守り、水を守ることができることを説明しています。流域材に固執せず、国産材、神奈川県産材も含めて地域材を、食べ物の地産地消と同じ感覚で使うことで豊かで健康な住まいづくり、暮らしづくりをしましょうと呼びかけています。関連団体と連携して県内各所で、桂川・相模川流域森林組合、神奈川県建具協同組合、横浜市水道会館等と協同開発した流域材で製作した木製の列車=水源列車等を展覧して啓発活動をしました。



水源列車の展覧は屋外が多く、四季折々の風景の中で、親子づれにとって楽しい思い出を提供しているのでは……。感想は「楽しかった」「木の香りがよかった」等々(津久井まつり)

★多数の神奈川県内ビッグイベントで啓発

水と流域の専門性を生かして、かながわ地球環境保全推進会議による日本大通りでの「アジェンダの日」、横浜市水道局等の市内各所のイベント、かながわ県民センターでの「水源の恵みフェスタ」、川崎市内「川崎ネイチャーフェスティバル」、そして今年は特に全国植樹祭関連で、プレイベントの相模原市津久井湖桜まつり、本イベントの秦野・戸川公園への参加等で、桂川・相模川流域協議会及び相模川よこはま地域協議会をアピールしました。

横浜市、川崎市をはじめとした大都市を含む神奈川県東部地域に住む私たちは、桂川・相模川が流れている地域ではありませんが、桂川・相模川の恩恵に浴している地域(拡大流域圏内の一つの構成地域)です。端的に言えば桂川・相模川は最大の水道水源であり、都市住民の命の水が供給されていますので、他の河川の水源地の方々への感謝も忘れずに活動しています。

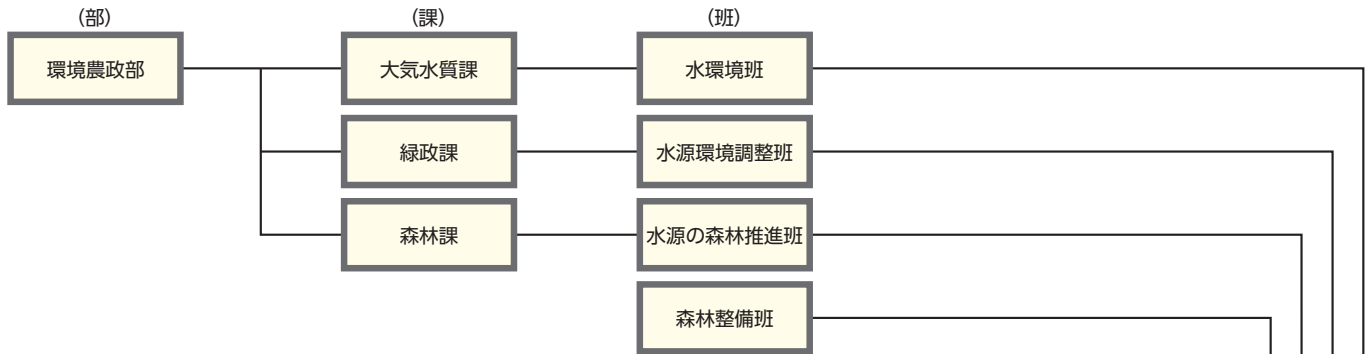
神奈川県における組織再編について

平成22年4月1日付けで、神奈川県は組織再編を行いました。

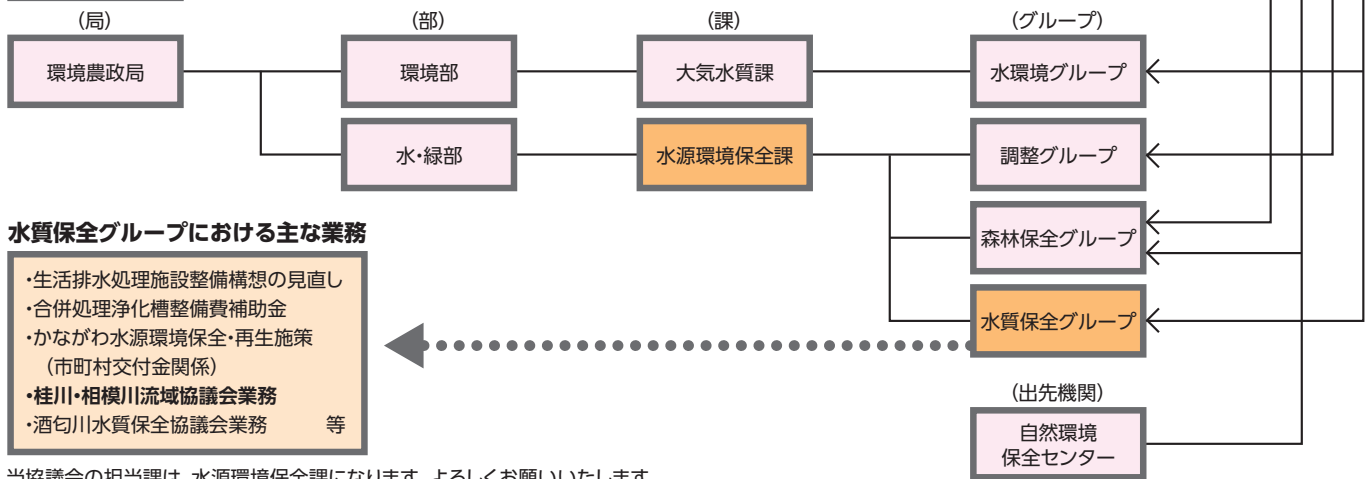
【主な変更点】

- 部課制から局部課制に県庁組織を改編
- 従来の課を小分け化し、担当課長・担当代理の職の廃止により意思決定を迅速化

平成22年3月まで



平成22年4月から



水質保全グループにおける主な業務

- ・生活排水処理施設整備構想の見直し
- ・合併処理浄化槽整備費補助金
- ・かながわ水源環境保全・再生施策 (市町村交付金関係)
- ・桂川・相模川流域協議会業務
- ・酒匂川水質保全協議会業務 等

当協議会の担当課は、水源環境保全課になります。よろしくお願いいたします。

浜口先生を偲ぶ

既にご存じのこととは思いますが、本誌にも長らく連載をいただいていた浜口哲一先生が去る5月3日にご病気のためお亡くなりになりました。先生は東京大学農学部林学科大学院の博士課程を中退して平塚市立博物館の設立に参加され、そのまま学芸員として就任されました。後に博物館長になられて、退職後は神奈川大学の教授として学生の指導に当たられました。学芸員の初めころから、平塚の自然を守る会、相模川の河川敷を舞台にした水辺の楽校、ビーチコーミングという海岸漂着物調査などの市民の活動を率先して支えてられました。多くの市民が先生を慕いそのご指導で自然を見る目を開かれ、いまは余りにも早く逝ってしまわれたことを心から惜しんでいます。先生は宇宙のどこかに一つの星となって私たちの活動を見守っていて下さることと思います。(井上 駿)

桂川・相模川流域協議会入会のご案内

あなたのその力が豊かな水環境を創ります。協議会では、さまざまな活動を通じて、水源環境の保全・再生に努めています。桂川・相模川流域協議会に興味を持った方はぜひ入会してください。入会手続きは、下記事務局にお問い合わせください。

編集後記

遅くなりましたが、2010年度最初の号をお送りします。関係者にはご迷惑を、そして発行を待ち望んでいた皆様にはご心配をおかけしました。誠に申し訳ありませんでした。

さて、今号から新連載が2つ始まります。編集委員が流域を案内する「流域紀行」と元琉球大学教授小島先生が民俗学的視点から書かれる「川の記憶を訪ねて」です。今後の展開が楽しみです。(K・H)

表紙写真：撮影場所 神奈川県相模原市緑区烏屋奥野 松茸山 撮影者 倉橋満知子



この印刷物は色覚障害の方に配慮し制作しています。

本誌に対するご意見・ご感想を下記事務局までお寄せください。

あじえんだ113 No.25(2010.12発行)

発行 桂川・相模川流域協議会
編集 あじえんだ113編集委員会

桂川・相模川流域協議会ホームページアドレス <http://www.katura-sagami.gr.jp>

事務局 山梨県富士・東部林務環境事務所 〒402-0054 都留市田原3丁目3-3 TEL 0554-45-7811 FAX 0554-45-7807
神奈川県環境農政局 水・緑部 水源環境保全課 〒231-8588 横浜市中区日本大通1 TEL 045-210-4358 FAX 045-210-8849